

ベンボ『俗語論』の16世紀中期フランスにおける受容に関する一考察 —— ジャン＝ピエール・ド・メムの『イタリア語文法』を中心に ——

伊藤 玄吾

はじめに

16世紀フランスにおけるイタリアの俗語作品の影響については16世紀当時から実に多くのことが論じられ、また19世紀後半から20世紀前半にかけての精密な文献学的考証を踏まえた文学研究、とりわけ詳細を極めた源泉研究を通して、フランス16世紀の作品の多くがイタリアの作品をモデルに書かれていたことが明らかにされてきたこともあり、もはやイタリアを抜きにしてフランス・ルネサンス文学を語ることができないという事実に対し異を唱える者はほとんどいない。しかしながら、その影響の程度や影響の本質性について語る段になると途端に、できるだけそれを小さく表面的なものともみず側と、逆にそれを本質的で決定的なものともみず側との間で、意見が様々に分かれることになる¹。

確かに、文学作品としてはペトルルカの『カンツォニエーレ』、アリオストの『狂えるオルランド』、サンナザーロの『アルカディア』、ベンボの『アーズロの談話』、さらには『ポリフィーロの夢』といった作品が、ジャン・マルタンを始めとする優れた作家＝翻訳家の手で、16世紀中期までにまとまった形でフランス語に訳され²、多くの読者を得ていたことは事実であり、また言語論に関してもスペローニの『言語についての対話』が訳され、フランスにおける俗語をめぐる議論に大いに刺激を与えていた。このように、主に翻訳を通じてその全体像が比較的に見えやすい形でフランスの読者に提供されたイタリア俗語作品群の受容は、もちろんその影響の程度をどのように評価するかについては常に難しい問題が残るものの、比較的研究しやすい部類に入るだろう³。しかしながら、作品がそのような明確な形で翻訳されていないケースにおいては、より詳細で微妙な取り扱いが必要になり、それらを受容しようとしたフランスの文人たちの俗語に対する問題意識や創作に関する問題意識と突き合わせて丁寧

¹ また16世紀後半のフランスにおけるitalianisme「イタリア主義」とanti-italianisme「反イタリア主義」に関する論争、さらに19世紀後半から20世紀前半にかけて、イタリア及びフランスの近代的なナショナリズムを背景として文学史家たちの間で展開された、「影響」に関する論争についてはBalsamo (1992)の序章及び第1章で詳細に論じられている。

² 16世紀中期に出版されたそれぞれの作品の重要なフランス語訳は以下の通り：Vasquin Philieul, *Laure d'Avignon...Extrait du Poète Florentin François Pétrarque...*, Paris, Gazeau, 1548; Roland furieux, *composé premièrement en ryme thuscane par messir Loys Arioste*, Lyon, Sulpice Sabon, 1544; *Les Azolains...de la nature d'amour...*, Paris, M. Vascosan et G. Corrozet, 1545; *L'Arcadie de messire Jacques Sannazar*, Paris, M. Vascosan et G. Corrozet, 1544; *Hypnerotomachie ou Discours du songe de Poliphile...*, Paris, Jacques Kerver, 1544.

³ フランス16世紀におけるペトルルカ及びペトルキスモについての古典的研究としてはVianey (1909)、アリオストについてはCioranescu (1938)が重要である。

な分析と考察を進めることが必要になる。

本稿では、そうした比較的困難な受容研究の対象として、ベンボの『俗語論』をとりあげ、フランスにおけるこの著作の決して直接的ではないが興味深い受容のあり方について検討し、それが16世紀中期のフランスの詩人たちにおける俗語をめぐる考察において、また彼らが目指した新たなフランス語詩の創出のプロセスにおいて何らかの刺激を与え得たのか、もしそうだとすればどのような意味においてそのように言えるのかを考察してみたい。

I. ベンボの受容の様々な局面

ピエトロ・ベンボは多彩な側面を持つ作家であることから、その作品群の影響や受容も様々な方面に及んだと考えられる。ゆえにそれはペトルカの『カンツォニエーレ』やアリオストの『狂えるオルランド』のごとく一つの決定的かつ象徴的な作品に凝縮された形で論じることは困難である。

そうしたベンボ受容の様々な局面を考える上で最初に触れておかなければいけないのは、人文主義者としてのベンボについてであろう。16世紀のごく初期からフランスの人文主義者たちの間でも、ラテン語詩人としてのベンボ、洗練されたキケロ風の書簡を書くラテン語散文の名手としてのベンボの評判は相当高いものであり⁴、またその評判はその後の世代にも引き継がれていった。16世紀中期に書かれたデュ・ベレーの『フランス語の擁護と顕揚』（1549年）においても、ベンボはイタリア人文主義の頂点を極める象徴的な存在として言及されている。

Je me contenteray de nommer ce Docte Cardinal Pierre Bembe, duquel je doute si onques Homme immita plus curieusement Ciceron, si ce n'est paraventure un Christofle Longueil.⁵

（私はかの博学な枢機卿ピエトロ・ベンボの名前を挙げておくだけで満足することとしよう。〔フランスの〕クリストフ・ロングイユのような者を除けば、彼ほど巧みにキケロを模倣した作家はいないと思われる。）

ところで、このデュ・ベレーのこの一文は、ベンボのようなラテン語の名手が同時に俗語での創作にも熱心に取り組んでいることの意義を強調する文脈の中に置かれている。実際16世紀中期のフランスでは、ラテン語著作家としてのベンボ以上に俗語作家としてのベンボの評判が高まってきていた。そうした中で『アーゾロの談論』がジャン・マルタンによってフランス語に翻訳されて1545年に出版され、その後も版

⁴ プレイヤッド派詩人の中心人物の一人ジャン＝アントワヌ・ド・バイフの父で、フランスの駐ヴェネツィア大使も務めた人文主義者ラザール・ド・バイフ（1496-1547）がベンボに対して宛てた複数の書簡には、人文主義者としてのベンボへの深い尊敬の念が示されている（Nolhac 1894）。

⁵ Du Bellay（1549: f iiiii v^o）。

を重ねたことは当然ながらベンボ受容を考える上で重要な意味を持つ⁶。この著作において展開される宮廷風談論の魅力は、フィレンツェとの結びつきの強かった当時のフランス王の宮廷に集うイタリア趣味の貴族たちを当然ながら惹きつけるものであったし、またフランスの文人の間でも新プラトン主義との密接な関連において「愛」のテーマが盛んに論じられていたこともあって、作品の受容のための十分な土台が整っていたと言える。さらにフランスにおいてペトルカ風のソネット形式による抒情詩が流行する16世紀中期において、ベンボの俗語による抒情詩は、フランス詩の刷新を図ったデュ・ベレー、ロンサール、バイフといった重要な詩人たちに大いに読まれ、ペトルカとならんで彼らの詩作のもっとも貴重な手本の一つとされた⁷。

一方、16世紀後半になると、ベンボの作品群はフランスにおいてはあまり読まなくなり、ベンボの名も、フランス語とイタリア語の競合関係、それぞれの文学の優越性や先行性をめぐる決して生産的とは言えない論争において引き合いに出される以外にはあまり登場の機会を持たなくなっていった⁸。

従って、ベンボの俗語作品のフランスにおける受容を考える上で最も重要な時期は16世紀中期ということになるが、原語でベンボ作品を十分に解し味わうことのできる読者は限られていたことを考慮に入れ、あくまでもフランス語への翻訳や翻案を通しての受容という観点から整理するならば、『アーゾロの談話』は翻訳を通して作品全体がフランスの読者たちに提供されたケースであり、一方『詩集（リーメ）』については、作品全体が翻訳されることによってではなく、そこに収録されている個々の詩作品がロンサールを始めとするフランス詩人たちの数多くの作品のモデルとなることによって、またそのことが当時の注解者たちによって明示されることで、「ベンボ風」がいかなるものかを感じる機会がフランスの読者たちに与えられたケースといえる。そして、それよりもさらに目立たない形でフランスの読者に向けて提供されたが、著作の持つ内容の豊かさによって、多角的な影響を与えていったと思われるケースが『俗語論』である。

Ⅱ. 『俗語論』受容の様々な可能性

実際のところ、『俗語論』のフランスにおける受容について論じることは決して容易ではない。その理由としてまず挙げられるのは、この著作の扱う内容の地域的な限定性である。つまりイタリアにおける俗語の問題について極めて細部にわたってデリケートな議論を行っていること、またその俗語を使って創作活動をするという観点に立って初めて重要な意義を持つことになるような議論が少なくないことである。『俗

⁶ 『アーゾロの談話』は1545年にジャン・マルタンによって翻訳されて以来何度も版を重ねた（1547, 1551, 1552, 1553, 1555, 1560, 1571, 1572）が、1576年を最後にその出版は途絶えた。

⁷ ペトルカの作品自体の受容においてもベンボが大きな役割を果たしていたことは言うまでもない。Guillaume Rovilleによって1549年にリヨンで出版され、その後も版を重ねたペトルカの詩集にはベンボの『俗語論』を利用した注が付されていた。Balsamo (1992: 220) 参照。

⁸ フランスにおけるベンボ人気の衰退についてはBalsamo (1992: 202-203) 及びValori (1908)。

語論』が、トスカナ語を自らの創作活動の言語としていない読者にとっては正面から取り組みにくい作品であることは確かであり、この作品の全体が16世紀から現代に至るまでフランス語に一度もまとまった形で翻訳されていないという事実もそこから説明されよう⁹。一方で『俗語論』がまとまった形でフランス語に翻訳されなかったからといって、フランスにおいて『俗語論』の受容がほとんどなされなかったわけではない。これから見ていくように、それはむしろ独自の仕方を受容されたと言える。以下では、その受容の重要なポイントを3つに整理してみたい。

1. 俗語による創作活動の擁護と顕揚

ベンボは『俗語論』の第1巻において俗語による創作活動の擁護と顕揚のための議論を展開しているが、そうした議論が、特に16世紀中期のフランスにおいて、俗語であるフランス語文学がギリシア語やラテン語で書かれた文学作品の高みに達することが可能であることを盛んに主張していた陣営にとって、極めて大きな理論的・精神的支えとなったことは確かである。もちろんこうした主張はベンボ独自のものではないし、むしろ直接的な影響という観点からは、デュ・ベレーが『フランス語の擁護と顕揚』の執筆にあたって大幅に依拠し、また全体のフランス語訳も出版されたスペローネ・スペローニの『言語についての対話』が重要であろう。しかしながら、先のデュ・ベレーの引用にも見られたように、ラテン語の名手であると同時に、フランスの新しい詩のモデルとなる俗語作品を数多く生み出しているベンボによって俗語文学の将来性が力強く主張されているという事実は、特に16世紀中期の新しい世代のフランスの作家たちに対して少なからぬインパクトを持ったと思われる。

2. 古プロヴァンス語文学の「再発見」

『俗語論』の全巻を通して、イタリアにおいて書かれた俗語作品が言語的にも詩形式の点でも、古プロヴァンス語及び古プロヴァンス詩の影響を強く受けていることが示されているが¹⁰、フランスにおいては、ベンボのこうした指摘がイタリアの俗語文学に対するフランス俗語文学の先行性を示すための論拠として度々引き合いに出されることになった。16世紀のフランスにおいてはフランスの国家としての独自の（ローマ的＝イタリア的なものには還元されない）起源やその言語・文化的起源について盛んに論じられたが、『俗語論』におけるベンボの議論は、フランスの論者たちに、（南フランスと北フランスの言語的・文化的差異を無視する形で）フランスの過去を「再発見」させ、イタリアに対するフランスの言語的・文学的な先行性や優越性を主張する論拠を与えた。さらに、イタリアの俗語やその文学形式を模倣しても、それは外国のものを模倣することではなく、自らの過去の一部を模倣すること、自らのルーツ

⁹ これとは対照的に、イタリアの俗語についての他の書物、例えばスペローニの『言語についての対話』*Dialogo delle lingue* のフランス語訳は1551年に出版されている（Speroni 1551）。

¹⁰ ベンボの『俗語論』における古プロヴァンス語及び文学の問題については Debenedetti (1911) 及び Kohler (1934) の古典的な研究を出発点に、詳細な研究が重ねられてきている。

の一つに戻ることであり、というような屈折した論理も生み出した¹¹。しかしながら、古プロヴァンス語文学の重要性に関する議論は、ある意味16世紀イタリア俗語文学の先進性とその強い影響力を前にしたフランスの一部の論者たちのコンプレックスの解消のために利用されはしたものの、少なくとも16世紀中期においてはフランスの詩人たちの具体的な創作活動を刺激するものではなかったといえる。彼らが過去のフランスの俗語文学を論じる際の参照対象は基本的に過去の北フランスの文学作品であり、しかもそれらの作品は16世紀中期には模倣の対象というよりはむしろ言語的にも内容的にも完全に乗り越えられるべき否定的な対象となっていた。その一方で、洗練され完成度の高い俗語作品として参照と模倣の対象となっていたのは、ペトルカを始めとするイタリア詩人たちの俗語作品群であった。つまり、ベンボが『俗語論』において論じた古プロヴァンス語や古プロヴァンス詩の遺産は、16世紀中期のフランスの詩人にとって直接的に向き合う対象ではなかったのである。

3. 洗練されたイタリア俗語の文法の学習

『俗語論』受容の3つめのポイントは、特に第3巻における俗語文法に関する議論を、洗練された俗語としてのイタリア（トスカナ）語を学ぶための最良の教材として活用することである。しかしながら『俗語論』第3巻は極めて内容的に豊かである反面、論述の構造は複雑で、矛盾や理解の困難な箇所も少なくなく、実用的な観点からは相当扱いにくいものである。この第3巻をより実践的な形で活用しようものにするための、いわば「マニュアル化」ともいうべき試みはすでにイタリアにおいてなされていたが¹²、そうしたイタリアでの試みを参照しつつ、独自の形でベンボの『俗語論』を活用し、フランスの読者に向けて書かれたのがジャン＝ピエール・ド・メム Jean-Pierre de Mesmes の『イタリア語文法』*La Grammaire Italienne*（1548年）である。

当然のことながら、『俗語論』第3巻の中心的な課題の一つである、ペトルカやボッカッチョの用例を重視しつつトスカナ語の良き用法の規範を定めるというテーマについては、政治的・社会的・文化的背景の異なるフランスの多くの読者が、イタリアにおけるのと同程度の関心の強さと理解度を持って読み得たとは思われない。俗語の地域差の問題はイル＝ド＝フランスを中心に強力な中央集権的体制を形成していたフランスにおいてはイタリアほどには大きな問題とはならなかったし、また、俗語による過去の豊かな文学伝統はあったものの、そうした文学作品に使われている言語と16世紀のフランス語が語彙においても文法構造においても大きく隔たってしまっており、さらには作品のテーマという観点からも特にギリシア・ラテン古典文学の徹底的な教育を受けた16世紀の作家たちにとって15世紀以前のフランス語による作品は自らの創作における模倣や参照の対象にはなりにくかったという事情もある。

しかしながら、こうした言語的・文学的背景の違いがありながらも『俗語論』がフ

¹¹ このような論理でベンボの『俗語論』を利用しつつフランス語のイタリア語に対する先行性と優位を主張している代表的な著作はアンリ・エティエンヌの『フランス語の優秀性について』(Estienne 1579)である。Balsamo (1992: 72)も参照。

¹² ベンボ『俗語論』のイタリアにおける「マニュアル化」については Vanvolsem (2000)を参照。

ランスの読者の関心を引きつける要素を持ったとすれば、それは、とりわけ 16 世紀中期の詩人たちにとって、ベンボの論じる洗練されたトスカナ語によって書かれた文学作品こそが、フランスの過去の文学作品よりもはるかに重要な模倣と参照の対象となっていたことによる。16 世紀フランスにおけるペトラルキズモの受容に関する重要な研究を行ったジョゼフ・ヴィアネーは、特に 16 世紀中期の詩人たちにおけるペトラスキズモの受容においてはベンボ及びそれに続く詩人たちの作品が決定的であったことを強調し、とりわけヴェネツィアにおいて出版された詩選集 *Rime diverse di molti eccellentissimi autori nuovamente raccolte...* (1545 年) や *Rime de diversi nobili huomini et eccellenti poeti...* (1547 年) およびその第 2 版 (1548 年) がプレイヤッド派詩人たちに対して極めて大きな影響を与えたとする¹³。またこれらの詩選集の他にも、プレイヤッド派の詩人たちはベンボの『詩集 (リーメ)』を盛んに利用していたことが指摘されている¹⁴。この時代の重要な詩人の一人であるジャック・ペルティエは『詩法』第 2 巻第 4 章において、ベンボをペトラルカに並ぶ偉大な詩人としてとりあげている。

我々がみなペトラルカを大いに好み、模倣するのも理由なきことではない。その文体のこの上ない優美さ、ただ一つの対象に対して示される見事な多様性、そしてその作品における恋愛感情の生き生きとした表現を見るならば [...] しかしながら、ベンボもまたペトラルカに劣らないほどの極上の作品を作り上げたと言われている¹⁵。

実際、フランス 16 世紀中期のソネットを中心にした恋愛詩集の流行の源泉としてベンボの詩の果たした役割は極めて大きいと考えられている。フランス詩における新しい恋愛抒情詩の方向性を定めたとされるピエール・ド・ロンサールの『恋愛詩集』*Les Amours* (1552 年) は、翌年にマルク＝アントワヌ・ミュレによって、フランスの俗語詩としては初めて注解が付された形で出版されているが (Ronsard-Muret 1553)、そこにおいてベンボ作品をモデルにしたと指摘されている作品はペトラルカについて多い。また同じくプレイヤッド派の詩人の一人であるジャン＝アントワヌ・ド・バイフも『フランシース恋愛詩集』*Amour de Francine* (1555 年) において極めて多くのベンボの作品をモデルにしている (Baïf 2010: 1037-1047; Augé-Chiquet 1909 [1969]: 91-93)。

このように、イタリアの洗練された俗語詩を下敷きに新しいフランス詩を作り上げ

¹³ Vianey (1909: 84-85)。また Vianey の研究に見られるロマン主義的な「影響」や「独創性」の観念を批判的に再検討しつつ、イタリアの各種詩選集とフランス詩人の関係を考察している論文として Balsamo (2002)。

¹⁴ この点に関しては Balsamo (2002) および Gendre (2007) を参照。

¹⁵ « Nous l'[Pétrarque] avons tous admiré, et imité: non sans cause: vu la grand'douceur du style, la grand' variété sur un seul Sujet: et la vive expression des passions amoureuses qu'on voit en son Œuvre. [...] On tient toutefois que Bembo en a fait d'aussi sublimes que les siens. » (Peletier 1990: 293)

ていこうとした詩人たちにとって、対象となるイタリア俗語詩の言語的な細部に見られる彫琢と洗練についてよく理解することはそれなりに重要な意味を持ったと思われる。さらに、16世紀中期のフランスの文人たちの多くがイタリアと密接な関係を持ち、その中には折に触れてトスカナ語で詩を作る者も少なくなかったことを考えると、トスカナ語で創作を行う者に対するアドヴァイスという実践的な側面も、『俗語論』のフランスでの受容を考える上で全く無視してはならないだろう¹⁶。

Ⅲ. ジャン＝ピエール・ド・メムの『イタリア語文法』

1548年にパリのジル・コロゼ書店から出版された *La Grammaire Italienne, composée en François* 『フランス語で書かれたイタリア文法』のタイトルページには作者の名が明記されていない。タイトルページに続いて国王の出版允許状が置かれ、その後にアジャン司教 Hector Fregose¹⁷ への献辞があり、そこに著者の名前が I. P. D. M. とイニシャルのみで示されている。このイニシャルは同時代に活躍した詩人ジャック・ペルティエ・デュ・マン Jacques Peletier du Mans と混同されやすいが、これがジャン＝ピエール・ド・メムであることの決定的な証拠は本書の末尾に置かれた "per me stesso son sasso" という一文にある¹⁸。これをフランス語にそのまま訳せば "par moi-même, je suis Pierre" となり、Pierre de Mesmes という名前が現れる仕掛けである¹⁹。

このように、著者の正体がすぐには分からない形で出版された本であるが、ド・メムの周辺にいた人々にとって作者が誰かは自明のことであつたろう。ド・メムはデュ・ベレーやプレイヤッド派など16世紀中期を代表する詩人たちと親交があり、またアリオストの戯曲作品 *I Suppositi* の翻訳を行い、さらに彼自身が詩人としてフランス語のみならずイタリア語でも詩を残している²⁰。以上のことがらを考慮に入れば、彼の『イタリア語文法』が単に一般向けの実用的な文法教科書という理解では捉えきれない射程を持っていることが容易に推察できる。

そして実際に「トスカナ語の愛好者へ」"Aux amateurs de la langue Tuscanne." と題された序文の内容はこの書物の射程を考える上で大きなヒントとなる。この序文はベンボ『俗語論』との関連の上でも興味深い構成になっている。まず導入部分に置かれた、伝統的なトボスと修辞に満ちた十数行は、ベンボ『俗語論』第1巻の冒頭の文章をそのまま翻訳したものである。もし自然が、すべての人間が一つの同じ言語を話すようにしてくれていたら人間の労苦はいかに少なくて済んだことだろう、いろいろな地域を旅して回る人たちも自分が相手のことを理解しまた相手に自分を理解してもら

¹⁶ イタリア語でも詩や散文を書いたフランス人たちについては Picot (1902) を参照。

¹⁷ Hector Fregose (Ettore Fregoso) は、フランスとの関係も深かった Cesare Fregoso の息子である。ド・メム自身はフレゴソ家との関わりについて他に記録を残しておらず、関係の詳細は明らかではない。ピエール・ド・メムとイタリアの関わりについては、Picot (1902: 295-311)。

¹⁸ *GI*, 252.

¹⁹ ド・メムは他の作品においても同じような署名を行っている。この問題を含め、ド・メムに関する基本的な情報は Picot (1902: 295-311) 及び Balmas (1990) を参照。

²⁰ ド・メムのイタリア語による詩については、Picot (1902: 299-307) を参照。

うためにわざわざ苦勞して新しい言語を学ぶ必要がなかっただろう、等々と始まる文章である²¹。しかしド・メムは、この後ベンボのテキストから離れて本書独自の目的と射程について述べていく。まずは旧約聖書の記述に従って、人間の傲慢によって言語の混乱が生じ、人々が様々な地域に分散してしまったこと、しかし同時に神意によって、異なる地域の民たちがそれぞれの利益のために互いに交流することが不可欠なように定められたことが述べられる。そして外国人と関わる上で最も適切な方法が、直接相手の言語を使って話すことであるとし、具体例としてイタリア語、ドイツ語そして英語を解するフランスの貴族、商人、文人を高く評価する。その中でも最も高く評価されるのはイタリア語を解する者である。その理由として、イタリア語がフランス語にとって他よりも親しい言語であり、今日のフランスとイタリアの間の諸関係にとって益々有用性を持つようになっていく言語であることを挙げる²²。さらにフランスとフィレンツェの間の堅固で伝統ある友好関係にも触れ、もしこの2つの国の言葉が風習の違いと同じくらい大きく異なっていたなら、その友好関係はこれほど十分なものにはなりえなかったろうという²³。こうしてイタリア俗語の政治的・経済的・社会的な有用性に言及した後で、おそらくド・メムにとってより本質的な事柄が記されている。それは「この2つの言語の間の類似性がいかに大きいものであるかを読者の方々に判断してもらうためにこの文法を書いた」ということである²⁴。ここにはイタリアの俗語とフランスの俗語をその類似性において捉え、俗語文法の様々な問題を共有し、考察していこうというド・メムの基本的な姿勢を読み取ることができよう。

さらに、ド・メムはこの序文の最後において自分の著作がベンボの『俗語論』に多くを負っていることを明らかにする。

²¹ « Si Nature, mere, norrice, et gardienne des choses mondaines, eust donné à tous humains une necessité de parler d'une mesme sorte, tout ainsi qu'elle leur eslargist une voix et disposition vocale, je me fais point de doute, Seigneurs, qu'elle n'eust alegé les hommes d'une grande peine : attendu qu'il ne seroit besoing à ceux qui taschent passer en autres Provinces, et faire loingtains voyages, apprendre nouvelles langues, pour estre entenduz, et pour entendre les autres.» (GI, à iii v^o) .

ベンボのテキストは以下の通り（ド・メムが使用したのは『俗語論』の1538年版（Bembo 1538）であるので、本稿による引用も1538年版に基づくが、参照の便宜のためディオニゾッティ版（Dionisotti 1960）による章分け番号を〔I, 2〕のように示す）：« Se la natura, Monsignor M. Giulio, delle mondane cose produttrice, et de suoi doni sopra esse di spensatrice, si come ha la voce a gli hommini et la dispositione a parlar data ; così anchora data loro havesse necessita di parlar d'una maniera medesima in tutti; ella senza dubbio di molta fatica scemati n'havrebbe et allevitati, che ci soprasta. Conciosia cosa che a quelli, che ad altre regioni et ad altre genti passar cercano; che sono sempre et in ogni parte molti; non converrebbe, che per intendere essi gli altri, et per essere da loro intesi, con luogo studio nuove lingue apprendessero.» (PR, f.2 r^o, [I, 1]) .

²² « [la langue italienne] est plus familiere à la nostre, et pour le iour d'huy plus commode pour les affaires de la rep. Françoyse, et Italianne.» (GI, à iii v^o) .

²³ « D'avantage cela me fait dire, et quasi afermer, que non sans cause on a veu et voit on encor'entre les Françoyz et Florentins une amytié ferme et ancienne, laquelle n'eust esté entiere, estants leurs langages autant differentz, que leurs meurs et façons de faire.» (GI, à iii r^o) .

²⁴ « et à celle fin que vous jugiez de la grande conformité qui est entre deux langues, je me suis enhardy metre devant voz yeux ceste petite Grammaire Italienne, exposée en nostre vulgaire.» (GI, à iii r^o) .

しかし他の人の仕事を利用して栄誉や賞賛を自分のものにしようと望み、本来それらを帰すべき人々に帰することをしない者たちの列に加えられることなきよう、私は率直に告白しておこう。私はピエトロ・ベンボ殿の論考 (une prose faite par le Seigneur Pierre Bembo)、そして共通の母としてのラテン語と同じくらいにこの二つの言語に堪能な貴族の方々の意見に助けられ大いに支えられたのである²⁵。

もちろんド・メムの『イタリア語文法』はベンボの『俗語論』をそのまま翻訳したものではない。細部を検討すればフォルトゥニオやアッカリジオなどによる他の文法関連の著作を同時に活用していることは明らかである²⁶。ただ『俗語論』以外の文法書については一切明示せず、また彼が協力を仰いだとする羅伊仏に堪能な人々の名前も具体的に言及しておらず、ベンボの名だけを前面に出していることから、あくまでもベンボ風に洗練されたイタリア俗語の姿を示し、それをフランスの読者と共有しようとするド・メムの基本的姿勢がここに明確に示されていると考えられる²⁷。

以下では、こうした方向性を序文で表明している『イタリア語文法』が実際どのような構成を持ち、どのような形で『俗語論』を活用し得ているのかについて、具体例をあげながら考察していきたい。

1. 『イタリア語文法』の構成に関する諸問題

ド・メムの『イタリア語文法』は用例も含めその記述の最も多くの部分をベンボの『俗語論』に負っているが、大きく異なっている点もある。最初に目につくのは全体の構成に見られる差異である。決定的に異なるのは、『俗語論』の持つ対話編の形式が放棄され、より非人称的な性格の強い論述形式となっていることである。さらには文法項目に従って全体を区切り、それぞれの項目に伝統的な文法用語を使用した見出しをつけていることである。これによって、『イタリア語文法』はより体系的な文法書の体裁を与えることになったが、このような文法項目の整理と全体の構成においては、ド・メムがフォルトゥニオの『俗語の文法規則』(1516年)の他に、とりわけアッカリジオの『俗語文法』(1536年)そして『俗語の語彙、文法および正書法』(1543年)に多くを負っていることが明らかにされている²⁸。

²⁵ « Mais pour n'estre nombré au reng de ceux, qui des labeurs d'autrui desirent aquerir gloire et louange, sans la rendre à qui il appartient: ie confesse franchement avoir esté secouru et grandement allegé d'une prose faite par le Seigneur Pierre Bembo, et du bon avis de plusieurs gentilz personnages, non moins entenduz en ces deux langues, qu'en La Latine leur mere. » (GI, à iiiii v^o) .

²⁶ ド・メムの『イタリア語文法』のより詳細な源泉研究については Bingen (1984) を参照。

²⁷ もちろんこの一文は同時に、著者がベンボを大いに利用しつつも、必ずしもベンボに盲従するのではなく、他の様々な見方も取り入れた内容となっていることを示唆しているとも読むことができるが、そうだとすると「ベンボの意見を大いに参照する」という序文における態度表明は象徴的な意味において決定的な重要性を持っていると思われる。

²⁸ フォルトゥニオやアッカリジオからの借用の詳細については Bingen (1984: 635-636) 及び Mattaruccio (2000: 601-604)。興味深いことにアッカリジオの『俗語文法』のフランス語への翻訳 (Accarisio 1555) は、イタリア語原文と対訳の形で出版されているが、テキストがド・メムの『イタリア語文法』

ド・メモの『イタリア語文法』は冠詞についての記述から始まっている。この議論の順序は明らかにアッカリジオの『俗語文法』に習ったものであり、冠詞についての議論を名詞についての議論の後に置き、冠詞を名詞の一部として捉えているとの印象を与えるベンボの論述の仕方とはっきり異なっている。さらに冠詞についての記述の後には「冠詞の活用」« *declinaisons des articles* »が主格、属格、与格、対格、奪格の順に以下のような表にまとめられ、フランス語訳が添えられている。

no.	il cuor	le cueur
ge.	del cuor	du cueur
da.	al cuor	au cueur
ac.	il cuor	le cueur
ab.	dal cuor	du cueur ²⁹

また、ド・メモは冠詞に続いて名詞や代名詞の記述の後にもそれぞれ同じような変化表を置き、その体系性を読者にわかりやすく示す努力をしている。

一方、冠詞に関する論述においてド・メモがベンボに従わなかったことによって、独立した品詞としての冠詞の用法を明確にするどころか、人称代名詞との混同によって逆に混乱をもたらしてしまっているケースがある。例えば冠詞の単数形についての説明の終わりに次のような記述がある。

Si aucun desditz articles est lié avecq' le verbe, lors la signification se fait par un pronom: comme *digli*, c'est à dire *di à lui*, dy luy. *le di ch'io sarò là tosto ch'io possa*. C'est à dire, *di à lei*, dy à elle, que je seray là le plustost que je pourray. (上述の冠詞のいずれかが動詞と結びつけられると、それは代名詞としての意味になる：例えば、*digli* は *di à lui* [仏：dy luy] であり、*le di ch'io sarò là tosto ch'io possa* は *di à lei* [仏：dy à elle, que je seray là le plustost que je pourray] ということになる。*GI*,4-5)

実はこの箇所は、ベンボに従ったものではなく、フォルトゥニオの『俗語の文法規則』の以下の文章をほぼそのまま利用したものである。

Ne parmi essere indegno di notitia questo ; che, quando alcuno de gli articoli gia detti si aggiungono al verbo; tutto che habbiano la voce loro, la significatione è di pronome : onde quando si dice *digli* o *gli disse*, il sentimento è *di a lui* cosi. *le di ch'io saro la tosto ch'io possa*. cio è *di allei*.³⁰

に沿ってかなり書き換えられており、原典に対して奇妙に屈折した関係を示している。

²⁹ *GI*, 16.

³⁰ Fortunio 1516: f.11 v°.

ベンボが冠詞の議論と代名詞についての議論をそれぞれの場所できっちりと分けて展開しており³¹、その二つを決して混同していないことを見れば、ド・メムはベンボから離れることによって、ベンボ以前の俗語文法における冠詞と代名詞の混同を図らずも再導入してしまったということになる。

2. 『俗語論』のマニュアル化の問題

先に見たように、ベンボの『俗語論』の持つ複雑な構造をできるだけ単純化し、読者にとって参照しやすい形に整理すること、つまり『俗語論』のいわゆる「マニュアル化」の試みはすでにイタリアにおいて行われていたが、外国語話者向けの文法書となれば、そうしたマニュアル化の必要性はさらに高まる。ド・メムが『俗語論』における対話方式を放棄してより非人称的な性格の強い論述方式に変えたことや、ベンボの議論を伝統的な文法用語を使って整理しなおしたこと、体系をより明確に視覚的に示すために、冠詞、名詞、代名詞、動詞の変化表を添えたことなどは、当然そうした「マニュアル化」の方向性を示すものといえる。

『俗語論』において議論が混乱しているケースや、冗長になっている部分の多くが『イタリア語文法』においてはより整理され、整合性のある形で提示される。例えば、ベンボは遠過去2人称複数の語尾について論じた箇所で次のように記している。

La seconda [voce] medesimamente ne ha un'altra [regola] ; che elle in E. si vede sempre fornire in questa guisa AMASTE VALESTE LEGGESTE SENTISTE, et non altramente. (PR, f.81 r° [III, 35])

しかしベンボは直前の遠過去2人称単数について論じた箇所で、その語尾がstiの3文字を加えて作られると論じており («vi si giugne una sillaba di tre lettere cotali STI»)³²、ド・メムはその記述との整合性を重視して遠過去2人称複数の語尾を以下のように記す。

La seconde personne du plulier termine en trois lettres, qui sont *ste*: comme *amaste, vedeste, scriveste, sentiste*, et non autrement. (2人称複数3文字すなわち*ste*で終わる。すなわち*amaste, vedeste, scriveste, sentiste*のように終わり、例外はない。GI, 88.)

一方で、そうしたマニュアル化によって失われるものもある。『俗語論』における様々な語形の説明や解釈に曖昧さや矛盾が見られる場合には、それなりの理由があるのであり、それらを単純な形に整理してしまうことによって、ベンボがそうした語形を問題化した意味や戦略的な要素が失われ、言語的考察の深みが失われる危険が常に

³¹ ベンボは冠詞の *gli, le* については『俗語論』第3巻 (PR, f.58 v° -f.59 v° [III, 9]) で名詞についての議論の後で行い、代名詞の *gli, le* については代名詞の議論 (PR, f.67 r°-f.67 v° [III, 19]) の中で行っており、双方を混同したような議論はない。

³² PR, f.79 v° [III, 33] .

ある。その一例として、古典ラテン文法起源の規範的な文法用語の使用の問題がある。ベンボは『俗語論』において伝統的な文法用語の使用を敢えて避けることによって、俗語文法の性格を独自の仕方的分析し表現する試みを戦略的に行っていると考えられる。その観点からすればド・メモが行ったように『俗語論』の記述を従来の文法用語によって区切り直してしまうことは、ベンボの俗語文法の基本的な方向性を大きく歪めてしまうことになると思われる。ただその一方で、ド・メモの『イタリア語文法』の中には、古典文法の枠組みとの俗語文法のそれとの差異に意識的なベンボの議論にそれなりに留意していることを示す箇所も見受けられる。それが典型的な形で現れているのが接続法をめぐる議論である。ベンボは接続法 *congiuntivo* というドナトゥス以来のラテン文法用語をあえて使用せず、物事を「条件的に」語る動詞の部門（« *quella parte nella quale si parla conditionalmente* »）として記述しており、それには2通りの方法があるとし、*vorrei* と *volessi*, *amaresti* と *amassi* などの例を挙げている³³。ベンボはラテン語にはないこの2通りの表現方法に注目した上で、接続法と条件法を「物事を条件的に語る」カテゴリーとしてひとまとめに考える方向性を示していると言える。こうした観点に従う形で、動詞の具体的な語形を論じる順序も条件法現在、接続法半過去、接続法現在、接続法過去の順となっている。これに対しド・メモは伝統的な接続法という形態上のカテゴリーにそって、現在、半過去、そして過去や大過去へと議論を展開する。しかし接続法の半過去を論じる箇所においては上で述べたベンボの議論が、少しずつされた形ではあるが、それなりに組み込まれている。

Par la premiere personne du singulier subjunctif, vous direz *cio che io amassi amerei à grado*: et par la seconde, *cio che tu amassi, ameresti, à grado*. Et le Latin dit ainsi: *si quid amarem, libenter amarem*. Si j'aimois quelque chose, je l'aymerois de bon cueur, on bien par la seconde personne, *si quiquam amares, libenti animo amares*. Si tu aymois quelque chose, tu l'aymerois de bon cueur. Par ces exemples vous voyez, que la Langue Toscane est plus riche, que la Latine: d'autant qu'elle n'a en cest endroit que une façon de dire, et la Toscane en a deux: sçavoir est *amassi* et *amerei*, *amassi* et *ameresti*: (接続法〔半過去〕の1人称単数では、*cio che io amassi amerei à grado*、さらに2人称単数では *cio che tu amassi, ameresti, à grado* と言う。そしてラテン語では次のように言う: *si quid amarem, libenter amarem* (仏: Si j'aimois quelque chose, je l'aymerois de bon cueur) また2人称単数としては *si quiquam amares, libenti animo amares* (仏: Si tu aymois quelque chose, tu l'aymerois de bon cueur) と言う。これらの例から、トスカナ語はラテン語より豊かであることがわかるだろう。ラテン語がこの箇所ですなわち *amassi* と *amerei*, *amassi* と *ameresti* のごとく。GI, 104-105; cfr. PR, f. 86 v^o [III, 43].)

³³ PR, f. 86 v^o [III, 43].

またこの箇所で見出すべきはド・メムはトスカナ語の例文をラテン語に直し、さらにそれをフランス語にも訳して比較対照する形で示していることである。これは単にフランス語とトスカナ語を比較するだけでなく、古典語ラテン語との対比において、俗語の動詞の体系をよりの確に把握し、その表現の可能性を探る方向へ読者を誘うものといえよう。

またド・メムが論述の構成においてベンボに従っていないことも、内容面においてはベンボに従っていることを典型的に示す他の例がある。ド・メムが全体の論述の構成において多くを参照しているアッカリジオの文法では、接続法の前に "desiderativo" (願望法もしくは希求法) という項目を設けてその語形を示しているが³⁴、それを受けてド・メムも一応「願望法の各人称変化について」"Des personnes de l'optatif" という項目を立てている。しかしその項目において実際に述べているのは以下のようなことである。

Parce que les voix de la maniere de souhaiter se trouvent au subjonctif, duquel ferons mencion cy apres, et aussi que mondit seigneur Bembo n'en a fait aucune memoire, je m'en passeray de legier comme il l'a fait. (願望を示す法の各人称の活用は、接続法において見いだすことができるが、接続法についてはこの後で述べることになるし、またベンボ殿がそれ〔願望法〕について一言も触れていないということもあるので、私も彼にならって、速やかに素通りすることとしよう。GI,100.)

このド・メムの一文によって、ベンボが俗語文法において「願望法」という古典ギリシア語的なカテゴリーを設定することにあまり意味を見いだしていないことが強く印象づけられ、幾分屈折した形ではあるが、ド・メムはこの件に関するベンボ『俗語論』の論述の方向性をある程度正確に読者に伝えていると言える。

3. 俗語文法の諸問題の共有に向けて

これまでの例でも明らかになってきたように、ド・メムの『イタリア語文法』は単なる外国語の習得という実践的な目的を超えて、フランス語文法に関する考察とも密接に繋がっていつているように思われる。それはこの著作が書かれた16世紀中期の文人たちの関心を反映するものでもある。ド・メムの文法が出版された翌年(1549年)には、デュ・ベレーの『フランス語の擁護と顕揚』が、さらにその翌年にはフランス文法についての極めて重要な著作であるルイ・メグレの『フランス文法概論』が出ているが、俗語としてのフランス語の姿をより詳細に分析し、俗語による高度で洗練された作品を創造する可能性と必要性を説くこれらの書物は、イタリアにおけるベ

³⁴ ド・メムと同時代にフランス語文法を書いたルイ・メグレも « optatif » および « desideratif » という概念を立てて論じているが、動詞の形態論的な観点よりも意味論的な視点からの考察になっている。Meigret (1550 : f.70 v^o) および Lardon et Thomine (2009: 244) を参照。

ンボの試みと方法論的に完全に重なるものではないとしても、大枠においても細部においても多くの問題を共有していることは否定できない。ベンボの『俗語論』に多くを負うド・メモが『イタリア語文法』の中でフランスの詩人を引用することがあるが、それはこの二言語間の重要な文法的問題の共通性を十分意識してのことである。例えばベンボに従って過去分詞の性数一致に関する議論を展開した後で、ド・メモは以下のような一文を付け加えている。

De cest reigle Clement Marot Poëte François, et non moins bon Tuscan que bon François, et non moins bon Tuscan que bon François a fait ample mencion en un sien epigramme adressé à ses disciples.

(この規則 [= 過去分詞が先行する直接目的語に性数一致するという規則] に関しては、フランスの詩人であるクレマン・マロ、良きフランス人であると同じくらい良きトスカナ人であり、良きトスカナ人であると同じくらい良きフランスであった彼が、弟子に向けたエピグラムにおいてしっかりと言及している。GI, 92, cfr. PR, f.81 v^o-f.82 v^o [III, 36].)

実際にクレマン・マロの「弟子たちへ」と称されたエピグラムにおいて、師である詩人は、若い詩人たちに向けて、過去分詞の性数が先行する直接目的語の性数に一致するという原則を厳守すべきことを説いている。そして "Dieu en ce monde nous a faicts" 「神はこの世に我々を作られた」という文を例に挙げ、 "Dieu en ce monde les a faict" のように過去分詞を単数にすることは避けるべきだと述べる。そしてその論拠として、イタリア（トスカナ）語が引かれるのである。

L'italien (dont la faconde / Passe les vulgaires du monde) / Son langage a ainsi basti / En disant: Dio noi a fatti.³⁵ (その雄弁性において世界の他のすべての俗語に勝るイタリア語も同様な方法で言葉を構成しており、Dio noi a fatti というように言うのである。)

良き文法規則のあり方を判断する基準としてクレマン・マロがイタリア（トスカナ）語を引用し、またそれをド・メモが引用していることは、イタリア（トスカナ）語の用法が良きフランス語の用法を考える上でも大いに参考になり、権威となるものと考えられていたことを示すものである。マロの文法的な判断が決定的に重要な意味を持つとすれば、それは彼が単にフランス語で優れた詩を書くからだけでなく、トスカナ語とその文学作品に造詣の深い詩人であるからこそである、という考え方が16世紀中期におけるフランス俗語詩の新しい展開を支える世代の中心部において共有されていたことが、こうしたド・メモの記述の背後に窺われるように思われる。

ベンボの『俗語論』と向き合いながら、そしてフランスとイタリアの両俗語に共通

³⁵ "A ses disciples", vv. 23-26 (Marot 1993 : 240-241).

する文法上の諸問題を見据えつつ、さらに両者が共に持つラテン語に劣らぬ表現力を念頭に置きつつ書かれたド・メムの『イタリア語文法』は、単なる「外国語」文法ではなくて、伊仏両俗語が響きあい、新たな表現可能性を探り合う「俗語」文法を目指して書かれていったのではないかと思われる。

おわりに

ド・メムの『イタリア語文法』はフランスにおいて出版上の大きな成功を収めたわけではないし、また、より体系的な文法記述を好むフランスの文法学者たちによって言及されることもほとんどなかったようである³⁶。しかしこのような著作が現れたこと自体が、16世紀中期フランスのベンボへの関心の高さを象徴していることは疑いがない。ド・メムの『イタリア語文法』は、16世紀フランスの読者たちを魅了していたイタリアの俗語文学作品のより深く正確な理解のための、またその翻訳やそれを下敷きにした創作のための良き導きとなっているだけでなく、トスカナ語との比較対照を通じてフランス語自身に関するより深い考察へと誘い、フランス語で詩や散文を書く際に細部への注意を喚起させるような内容を豊かに含んでいる。もちろん、ド・メムの著作がフランスにおける『俗語論』受容の唯一の形ではない。とはいえ、『イタリア語文法』のような著作を、作者のド・メムが自らの名をはっきりと前面に出すことなく世に問うていることは、フランスにおける、ベンボ作品の地味ながらも確かな受容のあり方を象徴的に示しているのではなかろうか。

文献一覧

【テキスト】

Pietro Bembo

PR *Prose di Monsignor Bembo (Delle Prose di M. Pietro Bembo nelle quali si ragiona della volgare lingua scritte al Cardinale de Medici che poi è stato creato a sommo pontefice et detto Papa Clemente Settimo divise in tre libri. Edition seconda.)*, Vinegia, Francesco Marcolini, 1538.

『俗語論』の引用については上記の版における該当箇所とともに、参照の便宜のためにディオニゾッティ版 *Prose e Rime*, a cura di Carlo Dionisotti, Torino, UTET, 1960 の章分けを [I, 1] のように示した。

Jean-Pierre de Mêmes

GI *La Grammaire Italienne, composée en François*, Paris, Gilles Corrozet, 1548.

【引用参考文献】

Accarisio, A.

1536 *La Grammatica volgare di M. Alberto de gl' Acharisi da Canto*, Bologna, Vincenzo Bonardo et Marc'Antonio Compagni, 1536.

1543 *Vocabulario, Grammatica, et Orthographia de la Lingua volgare, con ispositioni di molti luoghi*

³⁶ ド・メムの『フランス語文法』の再版は1567年、1568年、1581年の3回のみである。Bingen (1984: 638)。

- di Dante, del Petrarca et del Boccaccio, Cento, 1543.
- 1555 *La Grammaire de M. Albert de la Charisi Dacento, tournée de Tuscan en François, Lovanii, Ex officina Bartholomei Gravii, 1555.*
- Augé-Chiquet, M.
- 1909 *La vie, les idées et l'œuvre de Jean Antoine de Baïf*, Paris, 1909 (Genève, Slatkine, 1969).
- Baïf, J.-A.
- 2010 *Œuvres complètes*, éd. Jean Vignes, II, 2, Paris, Honoré Champion, 2010.
- Balmas, E.
- 1990 « Jean-Pierre de Mesmes italianisant », in *Du Pô à Garonne. Recherches sur les échanges culturels entre l'Italie et la France à la Renaissance*, Actes du Colloque international d'Agen (26-28 septembre 1990), réunis par Jean Cubelier de Beynac et Michel Simonin, Agen, Centro Matteo Bandello, 1990, pp.389-90.
- Balsamo, J.
- 1992 *Les rencontres des Muses. Italianisme et anti-italianisme dans les Lettres françaises de la fin du XVI^e siècle*, Genève, Slatkine, 1992.
- 2002 « Les poètes français et les anthologies lyriques italiennes », in *Italique*, 2002, pp.9-32.
- Bingen, N.
- 1984 « Sources et filiations de la "Grammaire italienne" de Jean-Pierre de Mesmes », in *Bibliothèque d'Humanisme et Renaissance*, XLVI, n.3, 1984, pp.633-38.
- Cioranescu, A.
- 1938 *L'Arioste en France des origines à la fin du XVIII^e siècle*, Paris, Ed. des Presses Modernes, 1938, 2 vol.
- Debenedetti, S.
- 1911 *Gli Studi provenzali in Italia nel Cinquecento*, Torino, E. Loescher, 1911.
- Du Bellay, J.
- 1549 *La Deffence et illustration de la Langue Françoyse*, Paris, Arnoul L'Angelier, 1549.
- Estienne, H.
- 1579 *Project du Livre intitulé de la precellence du langage François*, Paris, M. Patisson, 1579.
- Fortunio, G. F.
- 1516 *Regole grammaticali della volgar lingua*, Ancona, Bernardin Vercellese, 1516.
- Gendre, A.
- 2007 « La Pléiade entre Bembo et l'Arioste », in *Italique*, 2007, pp.7-36.
- Kohler, E.
- 1934 « Le provençalisme de Pietro Bembo et l'élaboration des *Prose della volgar lingua* », *Mélanges de philologie d'histoire et de littérature offerts à Henri Hauvette*, Paris, 1934, pp.235-258.
- Lardon, S. et Thomine, M.-C.
- 2009 *Grammaire du français de la Renaissance, étude morphosyntaxique*, Paris, Éditions Classique Garnier, 2009.
- Marot, C.
- 1993 *Œuvres poétiques*, t.II, éd. G. Defaux, Paris, Classiques Garnier, 1993.
- Mattarucco, G.
- 2000 « “Neantmoins monsieur Bembus me conseille” : le *Prose* nelle grammatiche di italiano per francesi da de Mesmes a Lancelot (1549-1659) », in *Prose della volgar lingua di Pietro Bembo*, a cura di Silvia Morgana, Mario Piotti, Massimo Prada, Cisalpino Istituto Editoriale Universitario, 2000, pp. 601-615.

Meigret, L.

1550 *Le tretté de la grammere françoeze*, Paris, Chrestien Wechel, 1550.

Nolhac, P.

1894 « Pietro Bembo et Lazare de Baïf », in *Nozze Cian-Sappa-Flandinet*, Bergamo, Tipographia dell'Istituto Italiano d'Arti Grafiche, 1894, p.4-6.

Peletier, J.

1990 *Art poétique*, in *Traité de poétique et de rhétorique de la Renaissance*, Livre de poche classique, 1990, pp.235-344.

Picot, É.

1902 *Les Français italianisants au XVI^e siècle*, Paris, Honoré Champion, 1902.

Ronsard-Muret

1553 *Les Amours de P. de Ronsard Vandomois, nouvellement augmentées par lui, et commentées par Marc Antoine de Muret*, Paris, Chez la veuve Maurice de la Porte, 1553.

Speroni, S.

1551 *Les Dialogues de messire Speron Sperone, italien, traduit en françoys par Claude Gruget*, Paris, Jean Longis, 1551.

Vianey, J.

1909 *Le pétrarquisme en France au XVI^e siècle*, Montpellier, Coulet et fils et Paris, Masson, 1909.

Valori, E.

1908 « La Fortuna del Bembo fuori d'Italia », *Rivista delle Biblioteche et degli Archivi*, XIX, 1908, pp.67-82.

Vanvolsem, S.

2000 « La manualizzazione delle Prose: il caso dell'Acarisio », in *Prose della volgar lingua di Pietro Bembo*, a cura di Silvia Morgana, Mario Piotti, Massimo Prada, Cisalpino Istituto Editoriale Universitario, 2000, pp.589-600.